

「都市経営」シンポジウム

4月21日午後、京都大学吉田キャンパスで財政学研究会主催の「日本の都市経営の過去・現在・未来」をテーマにしたシンポジウムが開催された。大阪・淀屋橋から京阪特急で出町柳まで行き、京大キャンパスへ歩いた。久しぶりの京大であるが、大阪の自宅からは近くに感じられた。早く着いたのでキャンパスを回り、時計台近くの木陰でくつろいだ。



シンポジウムは3部構成で、第1部で高寄昇三・甲南大教授が「近現代都市経営史」と題して講演。高寄先生は長らく神戸市役所で活躍され、そのころから数多くの著作を刊行されてきた。なかでも明治・大正・昭和の13冊におよぶ大著は、地方財政史研究にとって貴重な成果である。高寄先生は都市経営にとって大切なのが、「市民福祉の極大化」と「施策選択の最適化」である。大都市の形成と都市経営として、戦前の6大市(東京・大阪・京都・名古屋・横浜・神戸)を取りあげ、都市ガバナンス・都市整備・都市経営の実態・財政運営、それに都市の選択・市長の決断などから、6大市の都市ごとの比較検討を行った。



第2部は高寄先生と宮本憲一先生との対談である。まず、宮本先生から「都市経営の総括—宮崎神戸市政を中心に」という問題提起された。戦後の自治体・都市経営のモデルとしての神戸市政評価をめぐり、実務家としての高寄先生の感想を交えて議論が展開された。宮本先生は都市経営の背後にある二つの潮流に注目する。ひとつは「都市社会主義」の流れをくむ都市政策、行財政改革、もうひとつは新自由主義の考えにもとづく民営化、小さな政府である。



第3部はフロア討論である。討論のトッパッターは京大の院生だったが、その後は宮本ゼミ関係者からの質問が続いた。

私もその一人である。高寄先生は明治・大正・昭和という時代変遷と関わらせ、戦前の大阪市政を評価した。第2代の鶴原定吉市長の時代に、公営交通からの収入で道路整備を進めた。こうした路線のうえに、関一市長が市営中心主義を掲げ、日本初の地下鉄建設と御堂筋整備などを実施した。こうした流れに注目したと述べ、現在の大阪市政のもとで地下鉄が民営化されるなど、関市長時代の財産が取り崩されつつあることなどを、どう考えるかと質問した。高寄先生は交通事業の民営化に疑問を示し、とくにバス事業の経営困難、総合的な行政こそ求められると指摘した。

今回のシンポジウムは論点が多岐にわたり、議論がかみ合わない点もあったが、私にとっては収穫も多かった。宮本先生が戦後史のなかでも転換の時代を迎え、市民がコミュニティでどう自立するか、共同体について議論する場が必要だと強調され閉会した。

(2018年4月24日)